

# 人吉盆地におけるランドスケープの特性分析

神藤正人\*・蓑茂寿太郎\*\*

(平成 16 年 5 月 24 日受付/平成 16 年 9 月 17 日受理)

要約：本研究は、農村地域において、自然的ランドスケープから人工のアノニマス空間（Anonymous）のランドスケープへの移行過程を、ランドスケープを構成する要素毎に時系列で分析する一方で、設計されたランドスケープ、オニマス空間（Onymous）の特性分析を試み、農村ランドスケープデザインにおけるコンセプト形成の方途を展望した。研究対象は、熊本県南部の人吉盆地を選定した。その結果、本地域のランドスケープ構造は、圃場整備後から現在までの道路網発達が人為的ランドスケープに影響を与え、設計されたランドスケープは施設本位によるものが顕著となり、コンセプトなしの空間整備は、農村風景を壊しかねないという知見を得、地域の「図」に関係したランドスケープの構築から、再び地域の「地」に関係したランドスケープ設計の重要性が示唆された。

キーワード：Natural Landscape, Man-made Landscape, Man-designed Landscape, 人吉盆地

## 1. 研究の目的

ランドスケープを概念的に認識する際に、自然的ランドスケープと人為的ランドスケープとに二分して捉えることがある。このうち後者の人為的ランドスケープをさらに「造られ成ったランドスケープ」と「設計されたランドスケープ」とに細分する 3 種類の考え方もある。イギリスの造園家 Nan. Fairbrother が「Natural Landscape」, 「Man-made Landscape」, 「Man-designed Landscape」と区分しているのは、この 3 類型である<sup>1)</sup>。本研究は、この「自然的ランドスケープ」、アノニマス（Anonymous）空間とも称される「造られ成ったランドスケープ」、そして、設計者が特定できる近代のオニマス（Onymous）な「設計されたランドスケープ」との 3 つの概念を用い、日本の農村地域において、これら 3 種がどのような賦存の状況にあるかについて調査し、筆者らがその必要性を説いている特定地域研究の一つの方法論を確立するための特性を分析したものである（図 1）<sup>2)</sup>。

ここで、自然的ランドスケープすなわち Natural Landscape は、地域の土地基盤を構成する山岳や河川に代表される自然の地貌が醸し出しているものである。これに対し、アノニマス空間としての Man-made Landscape は、地域の民衆たちが長い時間をかけて生活の中で作りあげたものを意味し、オニマスな空間としての Man-designed Landscape は、特定の主体が、計画・設計理念に基づいて、比較的短い時間の中で作りあげた空間を指している<sup>3)</sup>。本研究の着想は、ガーデンアイランド構想（1998）が国土政策の基本に据えられ、観光立国（2003）が新しい国づくりの方策に掲げられるようになった日本の現状をふまえている。周知のように日本の国土構造は、国土面積の 2

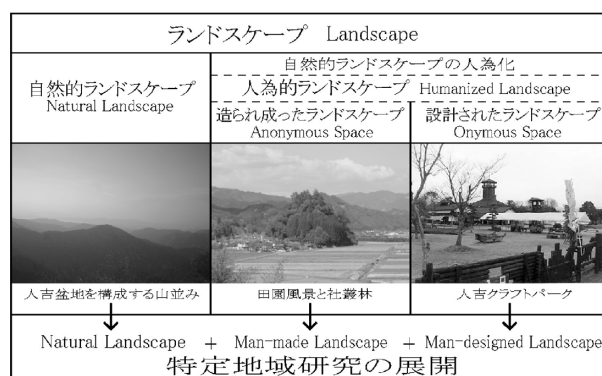


図 1 ランドスケープ概念の認識と特定地域研究の展開

割に国民の 8 割が密集し、残りの 8 割の国土を 2 割の国民が管理しなければならないという異常な不均衡状態にある。今までの環境政策は、人口の密集による問題が多い都市地域中心で始まり、次第に農村地域でも進められるようになってきた。しかし、翻って日本の農村地域において設計に基づき整備した空間、例えば、農村公園や地域活性化を目的に整備された観光レクリエーション空間がたくさん分布している現代ではあるが、設計を経て誕生した空間が十分なデザインワークを経ないままの標準設計で建設されているのではない。その結果、画一的なものが多く、同地域に分布する自然的ランドスケープやアノニマスな造られ成ったランドスケープと比較した場合に個性を欠き、それらとの調和にも問題があると感じるからである。また、設計されたランドスケープは、時として計算された空間であるがゆえ、あるいは短期的に機能がある程度限定してつくらざるを得ないゆえに、「無機質な空間」に陥ることが少なくないという指摘もみられるところである<sup>1)</sup>。

\* 東京農業大学大学院農学研究科造園学専攻

\*\* 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

そこで本研究は、純農村地域で流域圏としての地域的まとまりがあり、分析の対象となる Natural Landscape, Man-made Landscape, Man-designed Landscape が賦存する、熊本県人吉盆地を選定し、自然的ランドスケープからアノニマスな造られ成ったランドスケープへの変移の過程を、ランドスケープを構成する要素毎に時系列で詳細に分析する。一方で、設計されたランドスケープの特性分析を試み、これら二つの分析から農村ランドスケープデザインにおけるコンセプト形成の課題発見と課題解決の方途を論ずるものである。

## 2. 研究の対象と方法

### (1) 研究対象地域

研究の対象である人吉盆地は、熊本県の最南部に位置し、図2のように中心都市・人吉市と球磨郡内の4町5村で構成され、その総面積は1,536 km<sup>2</sup>、うち82.6%を林野面積が占める地域である。九州山地と盆地中央を流れる球磨川水系が作り出した平地とにより成り、典型的な盆地構造を有している。これが自然的ランドスケープの骨格といえる。本研究においては、この地域のうち、人為的ランドスケープへの変移の過程と、設計されたランドスケープの特性分析が主眼であるため、盆地を構成する九州山地の林野を除き、特に、人為化が進行したと考えられる盆地の底地とその周辺の外郭部である国土地理院発行の地形図、「人吉」の範囲（図2の四角枠内）、面積にして434.75 km<sup>2</sup>を分析対象とした。さて、日本列島には、このような盆地が39都道府県に大小155ヶ所あるとされている<sup>5-7)</sup>。その155ヶ所に属する市町村は424を数え、その総面積は66,313.23 km<sup>2</sup>に及び、日本の国土面積の18%を占める。したがって、同様な自然的ランドスケープの基盤を持つ地域への本研究成果の応用は小さくない。また、自然と人間の共生は、最も重要な今日の課題であるが、日本の国土の地形構造と居住地分布の実態からするなら、自然と人間との共存のあり方が強く問われるのは、可住地として大部分を占める平野と盆地においてであり、この点でも盆地研究は有意である。平成14年に発表された新・生物多様性国家戦略は、生物貴重種などの分布域である島嶼や山岳部に依拠する生物多様性だけでなく、里地・里山のそれを強く意識したものである<sup>8)</sup>。都市が立地する平野の端から山地に移行する一帯でも里地・里山はみられるが、より高い頻度で里山が分布するのが盆地である。

そこで本研究は、都市化の影響は小さいものの、新しい近代の空間整備が、地域らしさを壊すことに成りかねない盆地を研究単位として進め、そこで、研究方法として、次のような手順を採った。

### (2) 研究の方法

まず、目的に掲げた自然的ランドスケープと人為的ランドスケープとの関係を探るため、ランドスケープの人為化の過程を見ることとした。明治37(1904)年以降の土地利用変化を大日本帝国陸地測量部、昭和20(1945)年以降は内務省地理調査所、さらに昭和35(1960)年以降は国土

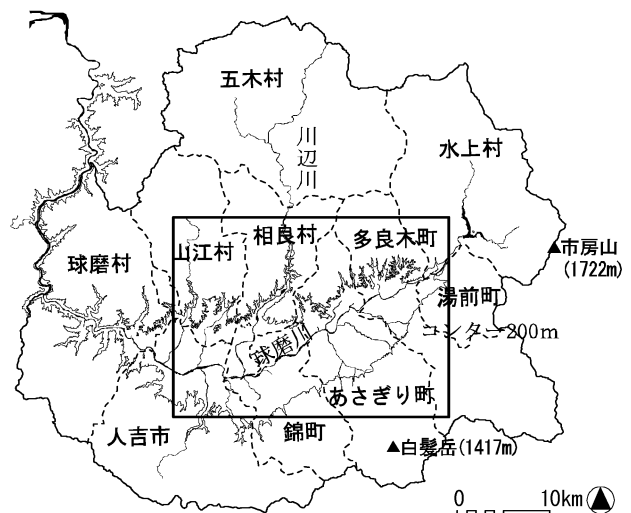


図2 研究対象地域

理院発行の1/50,000地形図「人吉」を用い、GIS手法を導入して、時代の異なった環境情報を可視化することで分析作業を進めた。これら地形図は、現在入手可能な地形図全てを使用し、ベースマップとなるそれぞれの地形図をスキャンニングし、Photoshopで加工後、CAD(AutoCad, VectorWorks)を使用して各年代の地図から現在までの地理的情報を定量化し、レイヤーで表示できるよう調査分析作業を進めた。

また、二つ目として、設計されたランドスケープを①空間の種類、②分布域(周辺土地利用と標高)、③開設時期、④資源依存性、⑤開設主体の公民区別、の5点で調査した。空間の抽出作業は、『最新熊本県万能地図』(熊本日日新聞社:1996)、盆地一帯の観光情報誌『とっておきの人吉・球磨』(ウルトラハウス:2002)、各自治体要覧とヒアリング調査によった。そして2003年3月と2004年3月に、抽出した全空間に対し現踏調査を行い、それぞれの空間について、全体的空間特性、空間の詳細事項、周辺の土地利用、調査空間の写真からなる個別カルテを作成した。このうち、④資源依存性の評価については、現踏調査の際、東京農業大学造園科学科生5名によって、森林・施設・景観・河川・歴史の5種で、その空間の成立上の、依存性があるかないかについて投票してもらう方法を採用した。すなわち、植生、建築物、眺望、水流や水面、歴史的事象の存在を前提とした空間整備の実態から判断して、総得票の多いものを資源依存性の評価として記録した。

以上、大きく二つに分かれる調査分析の結果を以下の観点から考察した。

① 自然的ランドスケープから人為的ランドスケープへの移行過程を、時系列的に地域社会構造の変化と対応させながら考察した。

② 設計されたランドスケープが自然的ランドスケープや人為的ランドスケープと、どのような関係にあるのかを探り、農村のランドスケープデザインにおけるコンセプト形成の方途を展望した。

表 1 時代時期設定の概要

分析時点	地形図発行年度	地域の主な社会事象
I 期	明治37 (1904)年	国鉄湯前船開通前
II 期	昭和 1 (1926)年	鉄道開通後
III 期	昭和10 (1935)年	戦前
IV 期	昭和28 (1953)年	戦後の食料増産を狙いとした開拓期
V 期	昭和42 (1967)年	圃場整備前の最後期
VI 期	昭和48 (1973)年	圃場整備直後、国道219号バイパス建設後
VII 期	昭和59 (1984)年	減反政策影響期、高速道路開通前
VIII 期	平成 2 (1990)年	高速道路開通後、町村合併気運期
IX 期	平成 9 (1997)年	現在

### 3. 分析の結果

#### (1) 人為的ランドスケープへの移行過程

自然的ランドスケープから人為的ランドスケープへの移行過程の分析は、現在入手可能な明治 37 年から平成 9 年までの 9 時代の地形図を、地域の主な社会事象と対応させ、明治 37 (1904) 年の I 期から、平成 9 (1997) 年の IX 期までの分析時点を表 1 のように設定し、データ化を行った。そして、自然的ランドスケープと人為的ランドスケープの分布状況を GIS 手法で処理することにより、分布形態と統計値の両面から考察できるよう作業を進めた。その結果、人吉盆地における人為的ランドスケープへの移行過程は、図 3 のように時系列に整理でき、これらのデータから以下の特徴を考察することができた。

##### a) 河川及び用水路と水田分布との関係

この地域を貫流する本流・球磨川には、右岸（北側）にあっては、下流部より山田川、川辺川他 7 つの河川がそそぎ込み、左岸（南側）では、胸川、鳩胸川、水無川、免田川他 6 つの河川が流入し、地域の自然的ランドスケープ基盤を形成し、これに合理的に適応する形態で水田耕作が始まった。これが人為的ランドスケープ成立の初期の姿である。I 期、II 期の水田分布は、多くは球磨川左岸に立地している。それは、左岸の広大な緩傾斜地の水田化を構想したことに起因し、具体には、灌漑用水路として延長 18.9 km の百太郎溝（1690）と幸野溝（1705）が開削されたためである。これにより原野としての自然的ランドスケープは急速に人為化し、この状態は、IV 期まで若干の増加をみながら進行し、V 期以降、ほぼ現状の規模になった。

##### b) 低平農地への建築物の侵入傾向

自然的ないしは人為的ランドスケープとしての伝統的な風景を大きく変えたのは、1970 年代の農業構造改善事業である。圃場整備直前期の V 期と直後の VI 期の水田分布ならびに道路網図を比較した結果、これが明確に指摘できた（図 4・図 5）。この構造改善事業は、水田圃場の区画割と共に農道の整備を推し進めたため、集落の分布にも影響を及ぼしている。すなわち道路整備が進んだことによる低平農地への住居や公共施設用途建築物の侵入である。なおこうした人為化の中で、広大な水田地帯にも幾つかの設計されたランドスケープ空間が出現するようになった。

##### c) 道路の整備と集落分布との関係

地域における道路網の拡大は、新しく誕生する人為的ランドスケープの分布に影響を与えた。明治期から現在まで

に集落区域面積は、2.65 倍に拡大しているが、その拡大した集落区域の分布位置を分析した結果、伝統的な集落は自然地形従属的で集塊的であるのに対し（図 6）、拡大した集落は、道路に依存する形で分散していることが明らかとなった（図 7）。

##### d) 林道と造林地の分布の関係

人吉盆地の輪郭をなす山並みは、標高約 300 m 以上から標高 1,500 m 級の山間部に亘って分布する森林地帯である。これらの一帯における初期の人為化は、多くが天然林を伐採する行為による自然的ランドスケープの改変であった。しかし既に明治 40 年代に天然林伐採後の計画造林が始まり、戦時中の混乱期に一時中断したものの、戦後の拡大造林を経て、植林地が優占する人為的ランドスケープとなった。これには、初期における谷筋に敷設されたキンマ道、昭和 30 年頃までの馬車林道、さらに馬車が三輪車になり、キンマ道に加えて索道、そしてトラック時代という伐採木の搬出技術の進歩が背景にあった（図 8）。

##### e) 森林区域へのレクリエーション施設の整備傾向

昭和 48 年の圃場整備直後から、森林区域に一般車両が通行できる規格の道路が整備されたことと、国民の森林への親しみ行動が増加したこと、さらには日本林業の不振対策として、森林区域に多くのレクリエーション空間が整備されるようになった。これらは、国庫補助等を伴う自治体経営によるキャンプ場などの観光レクリエーション空間整備である。

##### f) まとめ

自然的ランドスケープから、人為的ランドスケープへの流れを水田、道路、集落の時代変遷より考察した。特に圃場整備後の水田と道路との関係は密接であることから、図 2 で得られた水田面積の変遷の値を横軸に、道路延長の変遷の値を縦軸に布置してみると、水田面積と道路延長の相関  $R^2=0.7554$  から、水田面積の増加に応じて道路整備が進んだと考察できた（図 9）。そして、圃場整備を機に、道路が発達したことにより、その道路沿線に新しい集落が形成されたが、これには、核家族化に伴う世帯数増加という社会背景も影響している。

#### (2) 設計されたランドスケープの特性

本地域に分布する設計されたランドスケープは、全数で 96 物件であり、人吉盆地における設計されたランドスケープの分布図を得た（図 10）。その全 96 物件に対して現踏調査を行い、個別カルテ（図 11）を作成した結果から、設計されたランドスケープ 96 物件の個別データを一覧表（表 2）にして分析を進めた。これらを、①空間の種別でみると、都市公園法や自然公園法にはよらないが「公園」の名称が付いた空間が最も多く、全体の 30% を占めている。このことは、人吉盆地地域において公園需要が高いにもかかわらず、現行の公園法関連制度では対応しきれていないことを意味する。公園に続いて、都市公園、広場、キャンプ場、運動公園、温泉センター等があり、ゴルフ場、サイクリングロード、道の駅もある。②どのような土地利用の中に位置するかについて、地域を「森林地域」、「河川沿岸」、



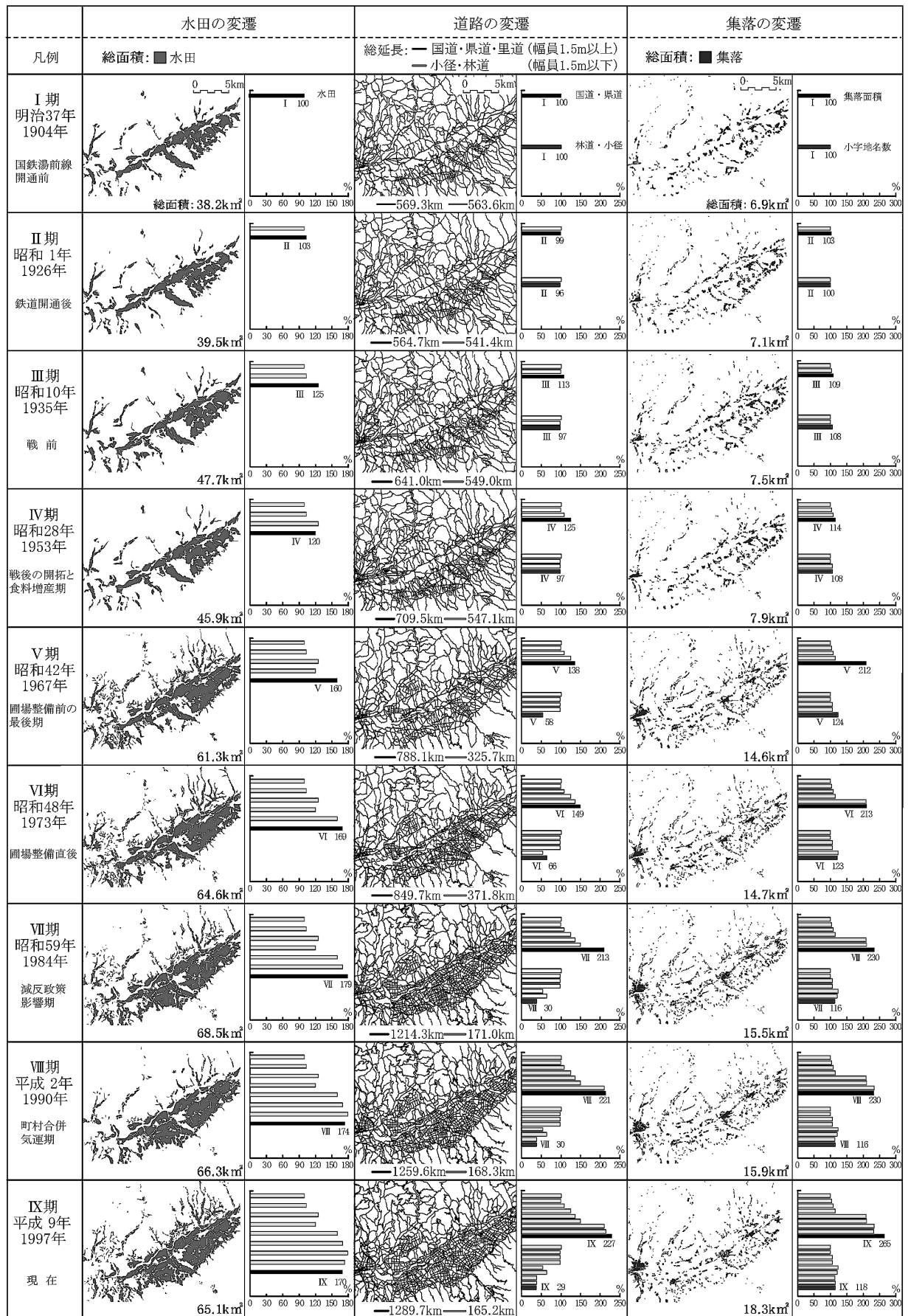


図3 人為的ランドスケープへの移行過程

図中の横棒グラフはI期を100としたときの増減率を示す



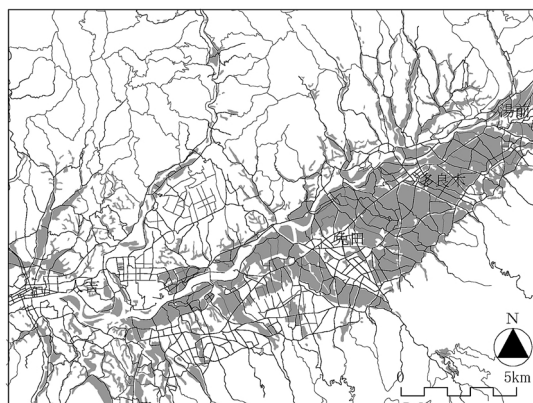


図 4 昭和 42 年Ⅴ期 圃場整備直前の水田と道路網

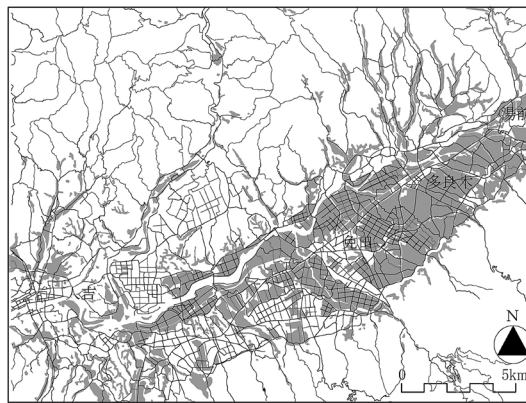


図 5 昭和 48 年Ⅵ期 圃場整備直後の水田と道路網

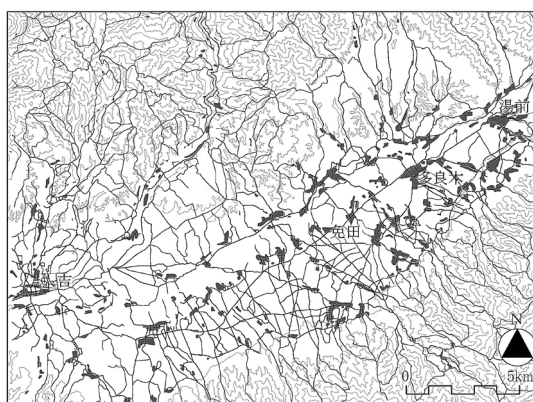


図 6 明治 37 年Ⅰ期 道路網と集落分布

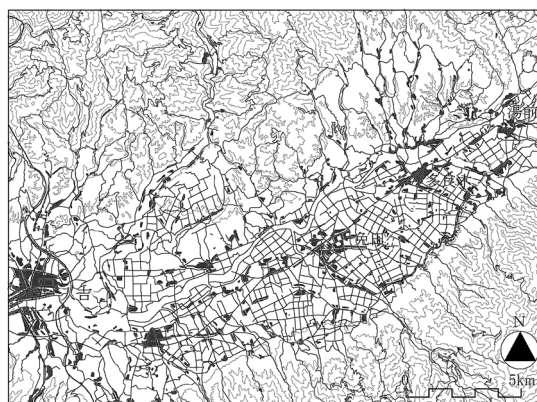


図 7 平成 9 年Ⅸ期 道路網と集落分布

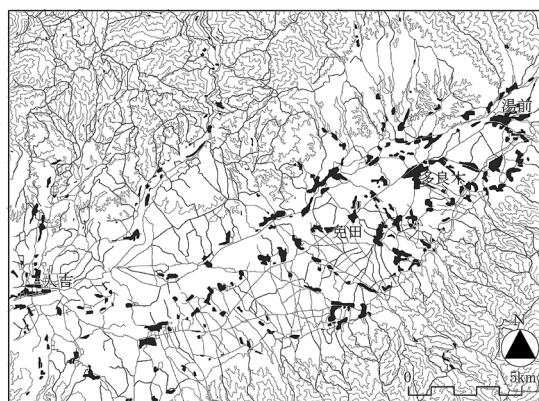


図 8 明治 37 年Ⅰ期におけるキンマ道など小径の分布

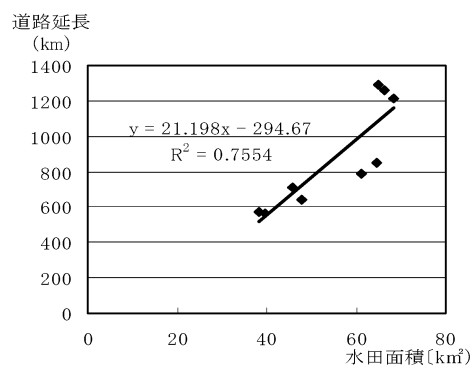


図 9 水田面積と道路延長との相互関係

「集落区域」, 「市街地」, 「田園地域」に5区分して分析した。区分については、個別カルテに示した地形図の位置情報と、現地空間の目視とを対応させ、さらに周辺調査により判断した。田園地域については、河川沿岸や集落区域を含まない田園の中に位置するものを記録した。その結果、「森林地域」に4割が分布していることが分かった。このことは、昭和48年の圃場整備直後からの道路網拡大に伴うレクリエーション空間整備に起因する。また、河川沿岸に

2割強、集落区域に2割弱、市街地と田園区域に1割弱という分布状況であった。③開設時期については、昭和49年以前を「1期」、昭和50年～63年を「2期」、平成1年～9年までを「3期」、平成10年以降を「4期」に区分して分析した結果、設計されたランドスケープの9割が、昭和50年以降の整備であり、「2期」に4割弱、「3期」に4割弱と続き、今後もこの整備傾向が続くと推測される。また、96物件中最古のものは、昭和37年に開設した水上村の市房



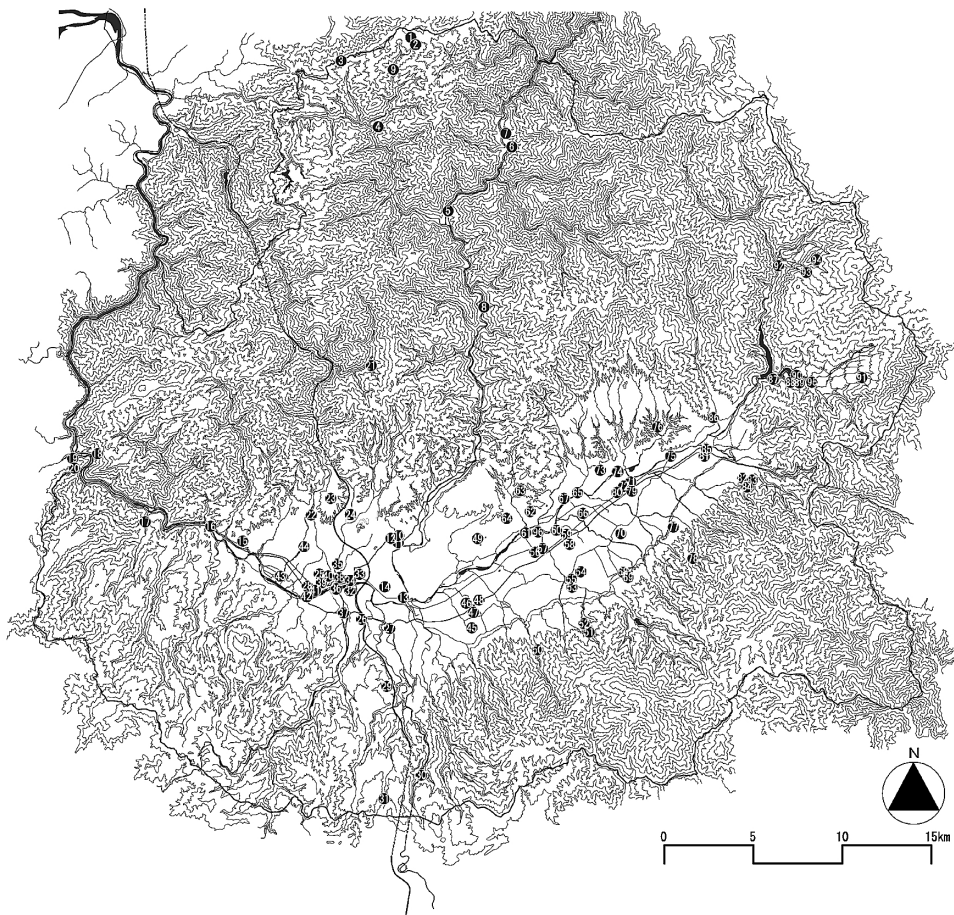


図 10 設計されたランドスケープの分布図

高原キャンプ場であり、昭和 35 年に完成した市房ダム（球磨川上流）の建設を契機に、本地域の整備が進められたことが明らかとなった。平成 16 年現在、最新の設計されたランドスケープとして、球磨川河川敷のサイクリングロードが開設している（一部整備中）。④空間の資源依存性の分析からは、施設本位型が全体の 5 割を占め、設計されたランドスケープにおける施設偏重の傾向が明らかになった。また、河川依存型と森林依存型が 2 割弱を占め、森林依存型は全体の 4 割の空間が森林地域に分布しているにもかかわらず、8.3% に留まった。さらに、歴史依存型は、盆地内に点在する相良三十三観音に代表される社寺仏閣や歴史的資源が多く分布する中、6.2% に留まり、今後、森林景観や歴史的資源の活用を重視した、コンセプト形成の方途が展望できる。⑤開設主体の公民区別では公共が 8 割を越え、農村地域のランドスケープの空間整備は公共事業主導であることが明確となった。

以上、単純集計による空間特性分析に加え、農村ランドスケープデザインのコンセプト形成の方途を得るために、「開設時期別に見た周辺土地利用」、「開設時期別に見た資源依存性」、「資源依存性別に見た周辺土地利用」の 3 種のクロス分析を進めた。結果、「開設時期別に見た周辺土地利用」（図 12）からは、森林地域には昭和 50 年以前から一定にランドスケープが作られ、河川沿岸の整備は、平成 9 年

調査空間 丸岡公園 調査日：2004.03.28 No.023

## &lt;全体的空間特性&gt;

人吉盆地を一望できる山の上にある公園。サクラとツツジで、地域の人に親しまれている。毎年、4月中旬にはツツジ祭りが開催される。

## 球磨郡の位置



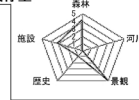
## &lt;空間の詳細事項&gt;

所在地	山江村
空間種別	公園
開設時期	平成1年～9年：3期
管理運営	公共
位置標高	240m
分布域	森林地域
資源特性	景観依存型

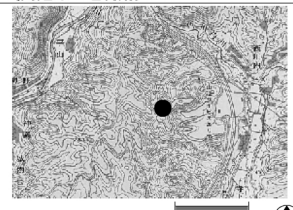
■自然的空間特性  
ヤマブシ（300m）、ツツジ（30m）、桜

■歴史的空間特性  
施設  
歴史  
景観

■社会的空間特性  
観覧車 10台、茶屋、売店、広場、グラウンド 1区

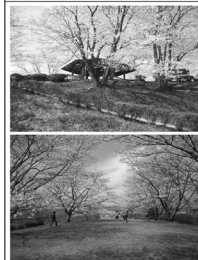


## &lt;周辺の土地利用&gt;



万江川と山田川に挟まれた、山の頂上に整備された公園。周辺は森林地帯。公園東側は、山江村中心部と人吉市方面の景が展開される。

## &lt;調査空間写真&gt;



■山の頂上にある展望台の東屋。

■山には沢山の桜が植えられ、村民の憩いの場となっている。



■山頂からの山江方面の景。正面が山麓、右の台地が村山で、その向こう側が人吉市街。

■山頂からの万江川方面の景。緩やかな起伏の芝生広場と桜が展開する。

図 11 設計されたランドスケープの個別カルテ例



表 2 設計されたランドスケープの特性一覧表

番号	施設名	所在地	空間の種類	分布域		開設時期	資源依存性	公民
				周辺土地利用	標高(m)			
1	端海野キャンプ場	五木村	キャンプ場	森林地域	960	3期	森林依存型	民
2	端海野自然森林公園		自然公園	森林地域	980	2期	森林依存型	公
3	大通峠公園		公園	森林地域	780	1期	景観依存型	公
4	白滝自然公園		自然公園	森林地域	600	2期	河川依存型	公
5	子守唄公園		公園	集落区域	290	3期	歴史依存型	公
6	横手公園		公園	河川沿岸	380	3期	河川依存型	公
7	宮園のイチヨウ園		公園	集落区域	380	1期	歴史依存型	民
8	瀬目公園		公園	河川沿岸	280	3期	河川依存型	公
9	大滝自然森林公園	相良村	自然公園	森林地域	800	4期	森林依存型	公
10	ふれあいリブレ茶湯里		温泉センター	森林地域	180	3期	施設本位型	公
11	瀬戸堤親水公園		公園	河川沿岸	160	3期	景観依存型	公
12	相良総合運動公園		運動公園	森林地域	180	3期	施設本位型	公
13	柳瀬運動公園		運動公園	河川沿岸	110	2期	河川依存型	公
14	チサンカントリークラブ人吉		ゴルフ場	森林地域	160	2期	施設本位型	民
15	球磨村総合運動公園		運動公園	森林地域	140	3期	施設本位型	公
16	球磨川リバーサイドキャンプ場		運動公園	河川沿岸	100	2期	河川依存型	民
17	一勝地温泉センターかわせみ	球磨村	温泉センター	集落区域	120	4期	施設本位型	公
18	球泉洞		観光地	河川沿岸	100	2期	施設本位型	民
19	球泉洞休暇村		キャンプ場	河川沿岸	100	2期	河川依存型	民
20	エジソンミュージアム		観光地	河川沿岸	100	2期	施設本位型	民
21	尾崎崎キャンプ場	山江村	キャンプ場	森林地域	460	3期	森林依存型	民
22	山江村温泉健康センター		温泉センター	集落区域	160	3期	施設本位型	公
23	丸岡公園		公園	森林地域	240	3期	景観依存型	公
24	中央グラウンド		広場	集落区域	160	2期	施設本位型	公
25	村山公園	人吉市	都市公園	森林地域	160	2期	景観依存型	公
26	川上哲治記念球場		広場	森林地域	140	2期	施設本位型	公
27	人吉クラブパーク石野公園		都市公園	森林地域	160	3期	施設本位型	公
28	カルチャーパレス		広場	市街地	100	2期	施設本位型	公
29	人吉梅林		公園	森林地域	300	1期	景観依存型	公
30	人吉ループ公園		都市公園	森林地域	460	2期	景観依存型	公
31	人吉民芸の村		キャンプ場	森林地域	600	2期	施設本位型	民
32	人吉城跡公園		都市公園	市街地	160	2期	歴史依存型	公
33	願成寺公園		都市公園	市街地	120	2期	施設本位型	公
34	下新町公園		都市公園	市街地	120	2期	施設本位型	公
35	泉田公園		都市公園	市街地	120	1期	施設本位型	公
36	中川原公園		都市公園	河川沿岸	100	2期	河川依存型	公
37	西間公園		都市公園	河川沿岸	100	3期	施設本位型	公
38	瓦屋公園		都市公園	河川沿岸	100	2期	施設本位型	公
39	ふれあい広場		都市公園	市街地	120	3期	施設本位型	公
40	城本公園		都市公園	市街地	140	2期	歴史依存型	公
41	宝来町公園	錦町	都市公園	市街地	100	2期	施設本位型	公
42	相良公園		都市公園	市街地	100	2期	施設本位型	公
43	中神公園		都市公園	河川沿岸	100	2期	河川依存型	公
44	市民運動広場		広場	河川沿岸	120	2期	施設本位型	公
45	錦カントリークラブ		ゴルフ場	田園地域	160	2期	施設本位型	民
46	国体駅伝運動公園		運動公園	集落区域	160	3期	施設本位型	公
47	錦町温泉センター		温泉センター	集落区域	160	3期	施設本位型	公
48	錦・くらんど公園		道の駅	田園地域	160	4期	施設本位型	公
49	球磨カントリー倶楽部		ゴルフ場	森林地域	180	1期	施設本位型	民
50	大平キャンプ場		キャンプ場	森林地域	300	4期	河川依存型	民
51	ビハ公園	あさぎり町 (旧上村)	キャンプ場	森林地域	340	3期	景観依存型	公
52	宮川内公園		公園	森林地域	280	1期	森林依存型	公
53	上村シンボルロード		サイクリングロード	河川沿岸	160	3期	河川依存型	公
54	上村総合運動公園		運動公園	田園地域	140	2期	施設本位型	公
55	上村ヘルシーランド薬師温泉	あさぎり町 (旧免田町)	温泉センター	田園地域	140	3期	施設本位型	公
56	おかどめ公園		公園	田園地域	180	3期	景観依存型	公
57	ふれあいロード		サイクリングロード	河川沿岸	140	3期	河川依存型	公
58	八幡児童公園		公園	集落区域	140	2期	歴史依存型	公
59	免田総合グラウンド	あさぎり町 (旧深田村)	広場	集落区域	140	1期	施設本位型	公
60	天子公園		公園	集落区域	140	2期	歴史依存型	民
61	向町河川公園		公園	河川沿岸	120	3期	河川依存型	公
62	高山運動公園		運動公園	森林地域	220	2期	施設本位型	公
63	熊本クラウンゴルフクラブ	あさぎり町 (旧須恵村)	ゴルフ場	森林地域	220	3期	施設本位型	民
64	天子の水公園		公園	森林地域	200	4期	景観依存型	公
65	中島親水公園		公園	河川沿岸	120	3期	河川依存型	公
66	寺池親水公園		公園	田園地域	140	4期	景観依存型	公
67	須恵村コミュニティセンター	あさぎり町 (旧岡原村)	温泉センター	集落区域	160	3期	施設本位型	公
68	岡原村総合グラウンド		広場	森林地域	200	3期	施設本位型	公
69	森園カントリーパーク		公園	森林地域	240	4期	景観依存型	公
70	温華乃湯温泉		温泉センター	田園地域	150	4期	施設本位型	公
71	多目的グラウンド	多良木町	広場	集落区域	160	3期	施設本位型	公
72	えびす温泉センター		温泉センター	集落区域	160	3期	施設本位型	公
73	八日原運動公園		運動公園	集落区域	180	2期	施設本位型	公
74	田代ヶ丘運動公園		運動公園	河川沿岸	140	3期	景観依存型	公
75	百太郎公園		公園	河川沿岸	160	3期	河川依存型	公
76	祓川運動広場		広場	森林地域	200	2期	施設本位型	公
77	中山運動広場		広場	森林地域	220	3期	施設本位型	公
78	妙見野自然の森展望公園		公園	森林地域	400	4期	景観依存型	公
79	駅前花公園		公園	集落区域	160	4期	施設本位型	公
80	ファミリーパーク宇宙ランド		公園	集落区域	160	3期	施設本位型	公
81	イベント広場レールウィング	湯前町	広場	集落区域	180	3期	施設本位型	公
82	グリーンパレスキャンプ場		キャンプ場	森林地域	300	2期	施設本位型	公
83	ゆのまゑ温泉湯薬里		温泉センター	森林地域	300	3期	施設本位型	公
84	ゆのまゑグリーンパレス		公園	森林地域	300	2期	景観依存型	公
85	時の公園	水上村	公園	集落区域	180	4期	施設本位型	公
86	水上カントリーパーク		公園	森林地域	240	3期	景観依存型	公
87	市房湖噴水公園		公園	河川沿岸	300	3期	景観依存型	公
88	桜園鑑園		公園	森林地域	300	2期	森林依存型	民
89	汗の原親水公園		公園	河川沿岸	300	3期	河川依存型	公
90	市房湖公園湯山運動広場		広場	河川沿岸	300	1期	施設本位型	公
91	市房高原キャンプ場		キャンプ場	森林地域	640	1期	森林依存型	民
92	古屋敷運動公園		運動公園	集落区域	360	1期	施設本位型	公
93	白水自然公園		自然公園	森林地域	840	2期	景観依存型	公
94	シャクナゲ公園		公園	森林地域	840	2期	景観依存型	公
95	高城公園	人吉市他	公園	森林地域	340	2期	森林依存型	公
96	湯前人吉自転車道		サイクリングロード	河川沿岸	120～200	4期	河川依存型	公

までをピークに減少している傾向が明らかになった。また、昭和50年以前には作られていなかった田園地域に、平成10年以降2割強作られており、逆に市街地には平成10年以降作られておらず、このことから今後の空間整備は田園地域に求められる傾向が予測される。「開設時期別に見た資源依存性」(図13)からは、平成10年以降、景観依存型の空間が若干、増加傾向にあり、その空間整備に今後の期待がもたれる。しかし、歴史依存型の空間は、平成期に入ると減少し、平成10年以降見られなくなった。「資源依存性別に見た周辺土地利用」(図14)からは、森林依存型や河川依存型は、それぞれの要素に依存分布しており、また、景観依存型も盆地景観を構成する森林地域に分布していることが明らかになった。歴史依存型の空間は、集落地域と市街地に点在しており、今後の地域づくりの重要な要素と考えられる。また、全空間の5割を占める施設本位型の空間は、どの地域にも分布する状況にあり、昭和期に作られた街区公園、各市町村に建設された運動公園・小運動広場、また、温泉センターなどが挙げられる。さらに、設計されたランドスケープの資源依存性を得票順に見てみると、全体的には、依存の高い空間と低い空間の差が、顕著に表れた。特に、施設本位の空間に票が集まり、逆に歴史依存の票は伸びなかった(表3)。個別空間では、街区公園や運動広場は、全体的に依存性が低く、これらの空間は、どこにでもできるランドスケープの典型例であり、こうした典型的な空間をどう複数の依存性に絡め、コンセプトを打ち出せるかが重要である。逆に、施設本位の値が低く、その他の要素の値が全体的に高い梅林や城址公園、集落区域の神社に作られた公園などは地域性を活かしたランドスケープであると言える。空間の資源依存性の分析からも明らかのように、全空間の5割が施設本位で作られているランドスケープを、今後、どう他の資源と絡めて空間を創出するかに課題があることが明らかとなった。

#### 4. 研究の成果と今後の課題

以上、大きく捉えて、①「自然的ランドスケープ」の「人為的ランドスケープ化」と②そのような「人為的ランドスケープ化」の中に見られる「設計されたランドスケープ」の空間特性の2面から人吉盆地の分析を試みた。その結果、本地域のランドスケープ構造は、圃場整備後から現在までの道路網発達に起因する形で、人為的ランドスケープに影響を与えたことが明らかとなり、設計されたランドスケープは施設本位による空間が顕著であり、コンセプトなしの空間整備は、農村風景を壊しかねないという知見を得た。

今後の農村ランドスケープデザインは、自然的ランドスケープとアノニマスな人為的ランドスケープへの対応が求められ、すなわち、地域の「図」に関係したランドスケープの構築から、再び地域の「地」に関係したランドスケープ設計への重要性が示唆された。

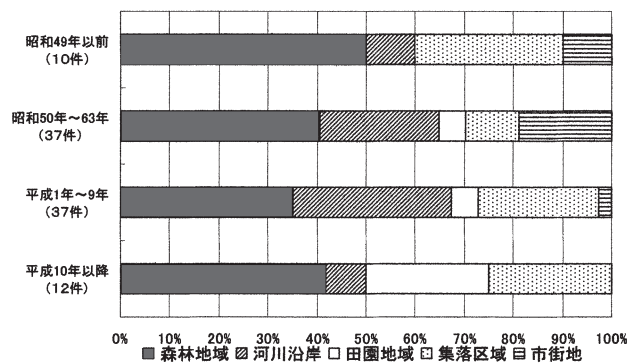


図12 開設時期別に見た周辺土地利用

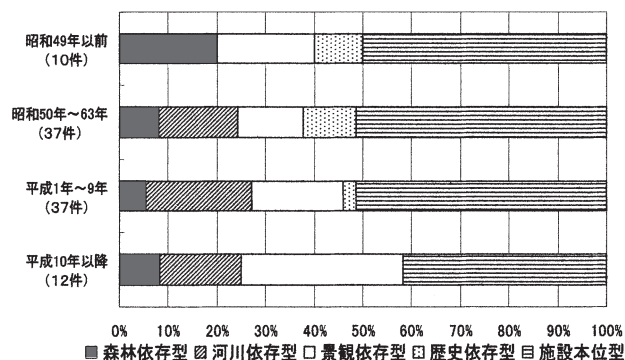


図13 開設時期別に見た資源依存性

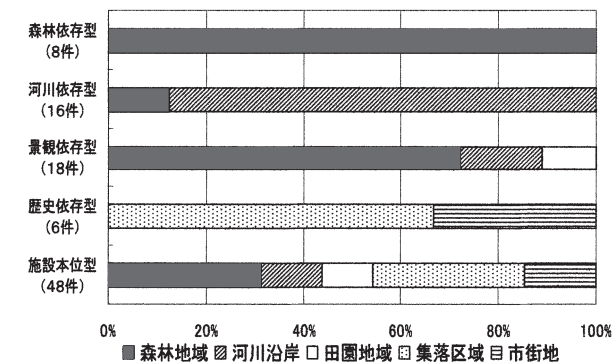


図14 資源依存性別に見た周辺土地利用

表3 得票数に見る空間の資源依存性

	森林依存型	河川依存型	景観依存型	歴史依存型	施設本位型
5票	8	18	24	6	48
4票	22	12	23	5	16
3票	16	4	26	6	16
2票	13	2	10	2	8
1票	4	5	5	6	6
0票	33	55	8	71	2
空間総数	96	96	96	96	96
平均	2.1	1.7	3.3	0.8	3.9



## 参考文献

- 1) Nan. Fairbrother, 1974. The Nature of Landscape Design, Architectural Press, London.
- 2) 養茂寿太郎, 2004. 文化的資産としての景観, 文化的景観の保全・活用と環境計画, 平成 16 年度日本造園学会公開シンポジウム・分科会講演集, 15-18.
- 3) IFLA 日本大会実行委員会, 1964. 日本の造園.
- 4) 大山 勲, 2001. 伝統的農村集落における道空間の形態と形成要因に関する研究—甲府盆地の平坦地に立地する集居農村集落を対象として—, 東京大学学位論文, 1-8.
- 5) 国際地学協会編, 1992. 新日本分県地図—全国地名総覧—, 全国地名索引, 国際地学協会, 38-39.
- 6) [http : // www.glin.org / prefect / nam / bonchi.html](http://www.glin.org/prefect/nam/bonchi.html), 5 / 24, 2004. 盆地コレクション.
- 7) 建設省国土地理院, 1999. 日本の典型地形都道府県一覧, 財団法人日本地図センター.
- 8) 環境省, 2002. 新・生物多様性国家戦略.

# Analysis of Landscape Characteristics in Hitoyoshi Basin

By

Masato JINDO\* and Toshitaro MINOMO\*\*

(Received May 24, 2004/Accepted September 17, 2004)

**Summary :** This study clarified the characteristics of landscape types distributed through the rural area. We took the Hitoyoshi basin in Kumamoto Prefecture as the area of study and examined natural landscape, man-made landscape, and man-designed landscape existing in this area.

As a result of this study, we clarified the changes to man-made landscape from natural landscape in form and statistical value. In addition, the distinguishing features of man-designed landscape, dependent on natural and cultural model resources included in both natural landscape and man-made landscape, was also clarified.

In this study, we found that in the discipline of rural landscape design, the creation of concepts was particularly important.

**Key words :** Natural Landscape, Man-made Landscape, Man-designed Landscape, Hitoyoshi Basin

---

\* Department of Landscape Architecture, Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture

\*\* Department of Landscape Architecture Science, Faculty of Regional Environment Science,  
Tokyo University of Agriculture